

福岡県 前原町

志登遺跡群 B地点

福岡県糸島郡前原町大字志登所在遺跡群の調査

前原町文化財調査報告書 第16集



1984

前原町教育委員会



志登遺跡群 B地点

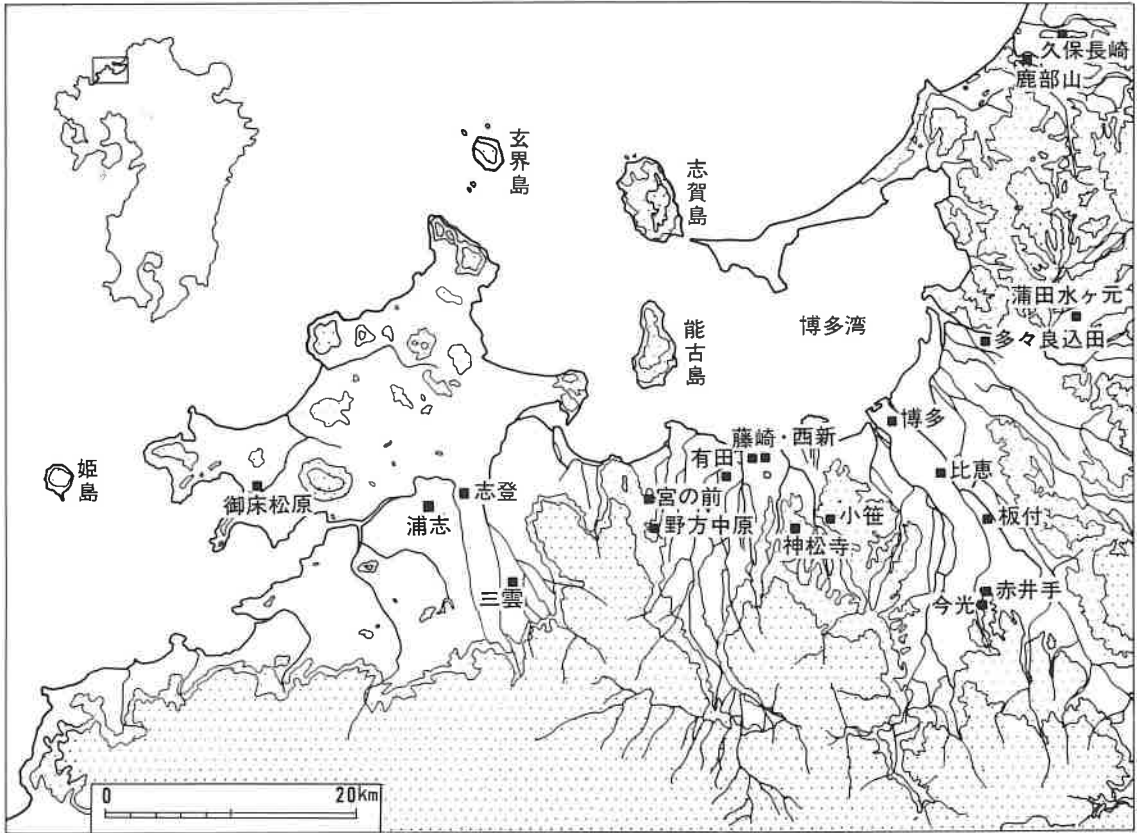


Fig. 1 糸島平野とその周辺における弥生時代後期の主要遺跡分布図(縮尺1/300,000)

(表紙カラー・東上空より調査区をのぞむ。後方は可也山)

序 文

前原町教育委員会は、このたび泊地区県営ほ場整備事業にともない、志登遺跡群の発掘調査を実施しました。

調査は57年度からのものであり、更に継続して行う予定ですが、本年度の一応の概要をまとめて報告する次第です。

調査にあたってご協力を賜った関係諸機関ならびに地元の方々には深甚の敬意を表する次第です。

昭和59年3月31日

前原町教育委員会 教育長 豊島 禮 蔵

例 言

1. 本書は、泊地区県営圃場整備事業にともない、前原町教育委員会が昭和58年9月から11月にかけて行なった埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 志登遺跡群における57年度の調査区をA地点、今年度の調査区をB地点とする。
3. 本報告書を前原町文化財調査報告書第16集「志登遺跡群B地点」とする。
4. 本書に用いた地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「前原」および前原町が建設省国土地理院長の承認をうけて調整した地形図である。
5. 本書掲載の出土遺物、各種実測図・写真は、前原町教育委員会が一括保管している。
6. 遺構の実測は石井扶美子が主に行ない、一部を川村 博・常松幹雄・柴田 彰が行なった。遺構全体図の製図を石井、土層断面図を川村が製図した。
7. 遺物の実測・製図のうち土器は主に中村昇平が行ない、一部、川村が行なった。銅鍬は常松が行なった。
8. 写真撮影は川村・常松が行ない、航空写真はPHOTO大塚（代表大塚清美）が行なった。
9. 本書の執筆は、IIの第1章を中村が行ない他を常松が行なった。
10. 本書の編集は、川村・石井・村田文秀の協力をうけて、中村・常松が行なった。

目 次

I. 志登遺跡に関する文化財概要	
第1章 調査の経過	2
第2章 組織の構成	2
II. 志登遺跡群B地点の調査	
第1章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第2章 遺構の概要	6
第3章 遺物の概要	10
第4章 小 結	14

I. 志登遺跡群に関する文化財概要

第1章 調査の経過

志登遺跡群の調査は、泊地区県営圃場整備事業に伴うもので、昨年に引き続き前原町教育委員会が主体となって行なった。調査区は福岡県福岡農林事務所との協議に基づいて、整備事業により遺跡の削平が予想される地区に設定した。調査面積は約2,000m²である。

泊地区の県営圃場整備事業は次年度も継続して行なわれる予定である。

第2章 組織の構成

志登遺跡群B地点の調査は昭和58年9月下旬より11月下旬にかけて実施し、その後出土遺物の整理を行なった。なお発掘調査に伴う組織の構成は次のとおりである。

調査主体 前原町教育委員会

総括	教育長	豊島禮蔵
	社会教育課課長	野坂猷英
庶務	文化係係長	吉村耕治
	社会教育係係長	中原直國
	社会教育係主事	久保静代
調査	文化係嘱託	常松幹雄
	文化係主事	川村 博

また現地における発掘調査ならびに遺物整理においては関係諸機関ならびに地元の方々をはじめ多くの方々の協力を得た。あつく御礼申しあげる次第である。

調査・整理補助

石井扶美子（別府大学考古学専攻卒）・柴田 彰（福岡大学法学部学生）

中村昇平（国学院大学文学部学生）・村田文秀（別府大学文学部学生）

鍋嶋さとみ（福岡大学薬学部学生）

約2ヶ月間にわたる調査の間、天候不順のため幾度となく調査区は水びたしとなった。またベルトコンベアや水中ポンプを駆使する急ピッチの調査であったが、事故もなく現地調査を終えることができたのは、発掘に携わった皆さんの意志の統一によるものと確信し、今後の調査の円滑に希する次第である。

II. 志登遺跡群B地点の調査

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

志登遺跡群は、糸島半島の基部に展開する糸島平野のほぼ中央部に位置する。遺跡は雷山山系より発して北流する瑞梅寺川・雷山川の両河川によって東西から挟まれており、雷山川の扇状地形の末端部にあたる。遺跡の北側には、弥生時代における糸島水道が今津湾と加布里湾を結ぶ線上に存在していたと推定され、現在は水田地帯が広がっている。

雷山川・瑞梅寺川に挟まれた糸島平野には、弥生時代から古墳時代にかけての著名な遺跡が数多く分布している。

今回、発掘したB地点の西方約500メートルに位置する志登支石墓群は、朝鮮半島の埋葬様式を採り入れた弥生時代前期から中期にかけての墓地⁽¹⁾であり、付近は小銅鐸を出土した浦志遺跡群とともに大陸文化との関わりが注目される地域である。

遺跡の南東約1.5キロメートルに位置する三雲遺跡群は、中国の史書「魏志」の倭人伝に記載されている「伊都国」の故地として重要な遺跡の一つである⁽²⁾。昭和49年からの発掘調査によって、弥生時代から古墳時代の多数の埋葬遺構・生活遺構が検出された。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての資料は、当該地域における土器編年の有効な資料となっている。

また、糸島平野の西方の古砂丘上に位置する御床松原遺跡は、大正時代、中山平次郎博士の調査によって弥生式土器に伴って中国の新王朝の貨幣である「貨泉」が発見されて以来注目を集めた。昭和57年度の調査では、弥生時代から古墳時代の住居址・埋葬遺構・土壇等が検出され、多くの土器・漁撈具とともに「半兩錢」や「貨泉」が出土したことから、弥生時代の土器に実年代を与えることを再認識するに至った⁽³⁾。

以上、糸島平野の各遺跡は、近隣する唐津平野及び早良・福岡平野とともに大陸文化摂取後の文化を究明するうえで重要な課題を含んでいるものであり、今後も継続した調査に大きな期待が寄せられるものである。

註

- (1) 文化財保護委員会「志登支石墓群」埋蔵文化財発掘調査報告4 1956年
- (2) 柳田康雄・小池史哲他(編)「三雲遺跡I～IV」福岡県文化財調査報告書第58・60・63・65集 福岡県教育委員会 1980～83年
- (3) 井上裕弘(編)「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会 1983年

- | | | |
|-------------|-------------|-------------|
| 1. 志登遺跡群B地点 | 11. 平原遺跡 | A. 志登遺跡群 |
| 2. 志登遺跡群A地点 | 12. 石ヶ崎支石墓 | B. 浦志遺跡群 |
| 3. 志登支石墓群 | 13. 銭瓶塚古墳 | C. 曾根遺跡群 |
| 4. 泊大塚古墳 | 14. ワレ塚古墳 | D. 井原遺跡群 |
| 5. 御道具山古墳 | 15. 端山古墳 | E. 三雲遺跡群 |
| 6. 浦志遺跡A地点 | 16. 築山古墳 | F. 飯氏古墳群 |
| 7. 糸島高校校庭遺跡 | 17. 千里シビナ遺跡 | G. 徳永アラタ古墳群 |
| 8. 篠原新建遺跡 | 18. 丸隈山古墳 | H. 今山遺跡群 |
| 9. 伏龍遺跡 | 19. 若八幡宮古墳 | |
| 10. 上鑑子遺跡 | | |

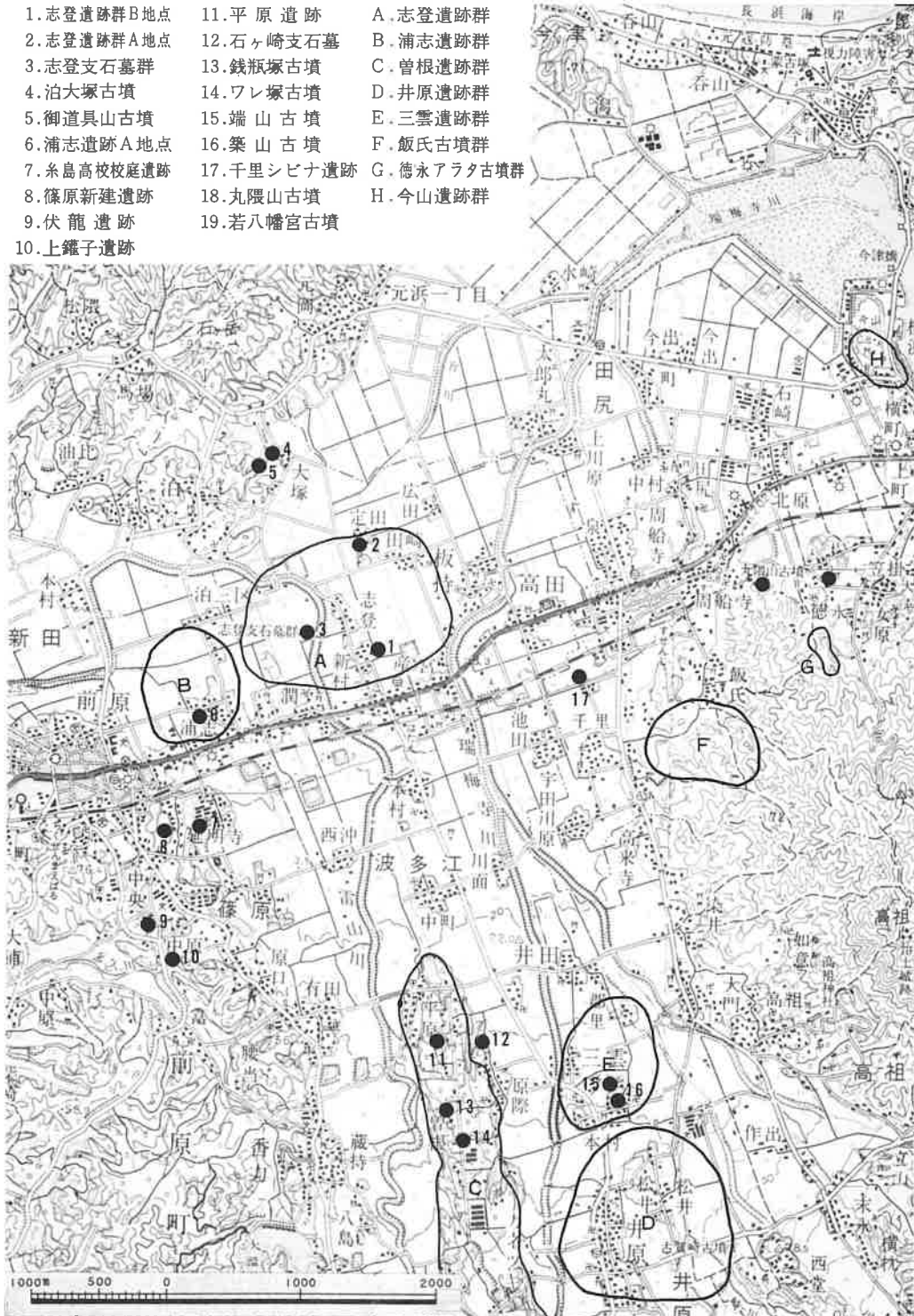


Fig. 2 志登遺跡群とその周辺の地形 (縮尺1/50,000)

5 調査区と周辺の立地



Fig. 3 調査区と周辺の立地 (縮尺1/2,500)

第2章 遺構の概要

発掘調査の結果、弥生時代から歴史時代に至る遺構が検出された。しかし耕作などによる削平をうけているため性格を断定できる遺構は多くない。

Fig. 5は、上空から撮影した調査区の全景である。北西方向には3条の溝状遺構が確認され、東側よりSD-01(東溝)・SD-02(中央溝)・SD-03(西溝)とする。

SD-01からは弥生中期後半から後期中頃にかけて、SD-02では弥生中期後半から後期後葉にかけての土器群が各々検出された。

SD-03では、弥生中期から一部歴史時代にまで下る土器群が、礫石と共に出土した。土器は粉碎された状況で、敷きつめられているといった形容があてはまる。このことからSD-03は道路状遺構の可能性が大きい(Fig. 4参照)。

掘立柱建物の柱穴と思われるもので、確実に建物となる遺構は6軒検出され、東側よりSB-01~06とする。その内訳は一間×一間(5軒)一間×二間(SB-03)である。柱穴より出土する土器は細片であるが、弥生後期に属すると思われる。またSB-03では柱根が検出された。他には根石を有する柱穴がある。

竪穴式住居跡は5軒確認され、時期は弥生後期から古墳時代後期のものまでである。東側よりSA-01~05とする。柱穴を検出できる遺構は少なく、出土遺物も多くない。

SA-02はSD-02(中央溝)に切られていることから、溝が掘られたのは、出土する土器の下限の段階であろう。

上記の遺構のなかで、最も出土遺物が多いのは溝状遺構である。しかしその性格について断定することは難しく、調査区の北側と考えられている糸島水道との関連などを併せて今後の検討を要するところである。

手短かであるが、以上が遺構の概要である。

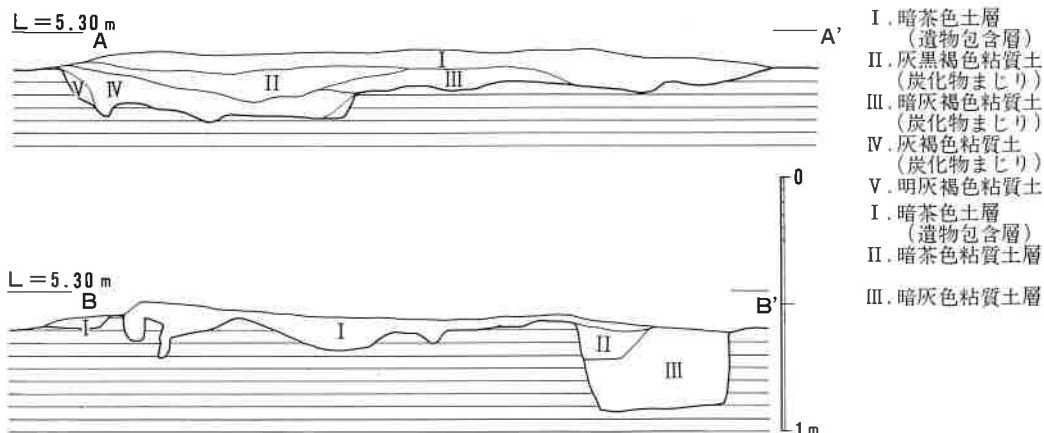


Fig. 4 志登遺跡群B地点SD-03(西溝)土層断面図(縮尺1/30)

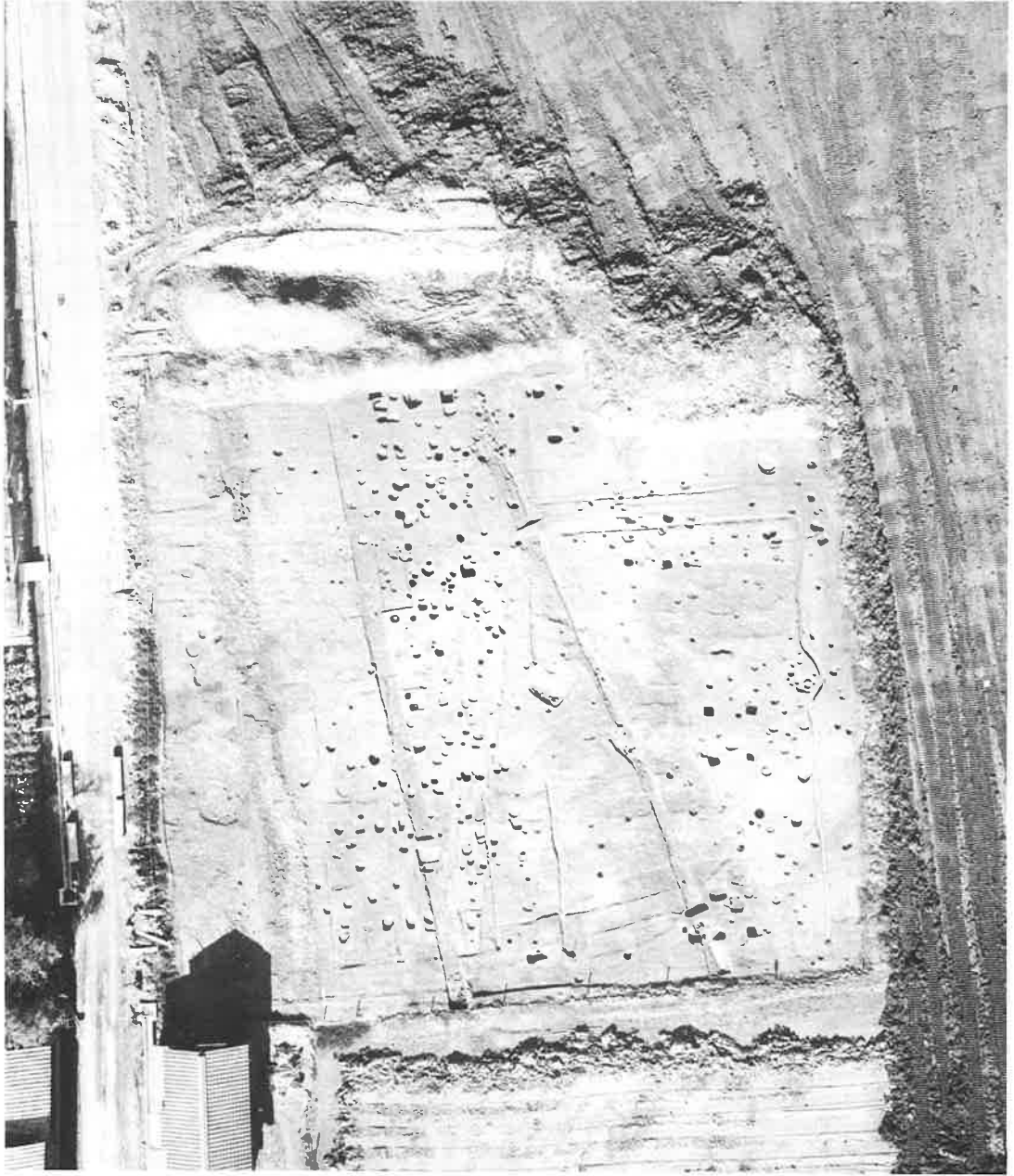


Fig. 5 志登遺跡群B地点調査区全景



Fig. 6 発掘調査風景 (後方は可也山)



Fig. 7 S.B-02 (北より)



Fig. 8 SA-05(左)とSA-04(右)(東より)



Fig. 9 SD-01を北よりのぞむ

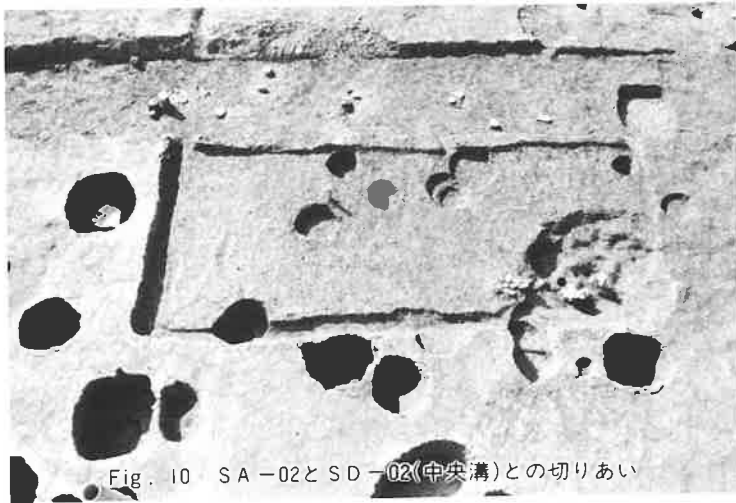


Fig. 10 SA-02とSD-02(中央溝)との切りあい

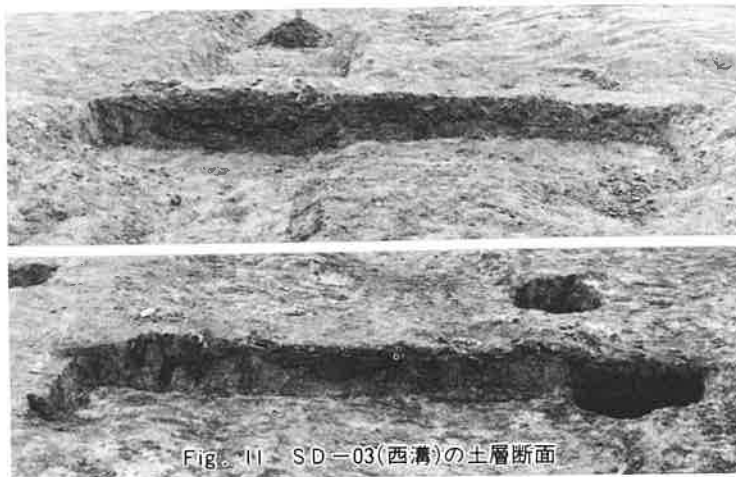


Fig. 11 SD-03(西溝)の土層断面

第3章 遺物の概要

出土遺物の主なものは溝状遺構出土の土器群である。遺物の量はパンコンテナでおよそ100箱におよぶ。実測した資料はその一部であるが、時期的な幅を考慮に入れて図化した。以下に土器の概要について記す。

SD-01は弥生中期から後期にかけての土器を包括している (Fig. 13)。時期の上限は6・7のような逆L字状口縁を呈するものの他にいわゆる袋状口縁の壺形土器があることから中期後半と考えられ、下限はおおよそ後期中頃までと考えられる。そしてそれらの時期のうち後期前葉の資料が少ないようである。

SD-02は図化した資料 (Fig. 16) の他に、弥生中期の甕形土器があり、上限はSD-01と同様である。下限については2のような重心が肩部近くにあるラグビーボール状の胴部を有する甕形土器や、高坏では4や5のように坏部の中央で屈曲してひらくタイプの前段階的な器種がみられることから後期後葉から終末近くの下るようである。

SD-03は、前章でも述べたように道路状遺構である可能性が大きい。そのため出土遺物の量は多いが、その殆どは粉碎した状況で検出された。図化した資料 (Fig. 17) はその上限と下限を示すが、とくに問題となるのは下限であり、道路状遺構としての時期は歴史時代まで下ると思われる。

溝状遺構では、銅鏃2点が検出された (Fig. 12)。何れも有茎式であり、SD-01出土 (1) は全長3.6cmで最大幅は0.7cmを測り、SD-02出土 (2) は全長3.1cmで最大幅は0.9cmを測る。1は共伴する土器から弥生時代に属するものである。2は共伴する土器には幅があるが類例となる型式から判断するとやはり弥生時代の範疇に入ると考えられる。

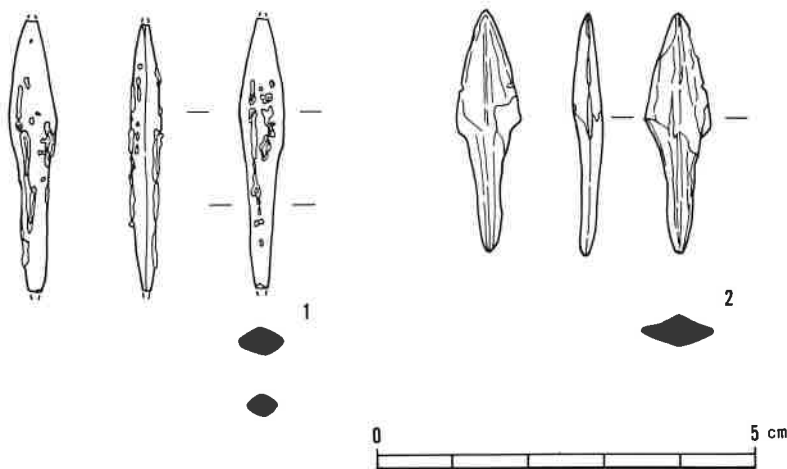


Fig. 12 志登遺跡群B地点出土銅鏃実測図<SD-01右・SD-03左>(原寸大)

11 遺物の概要

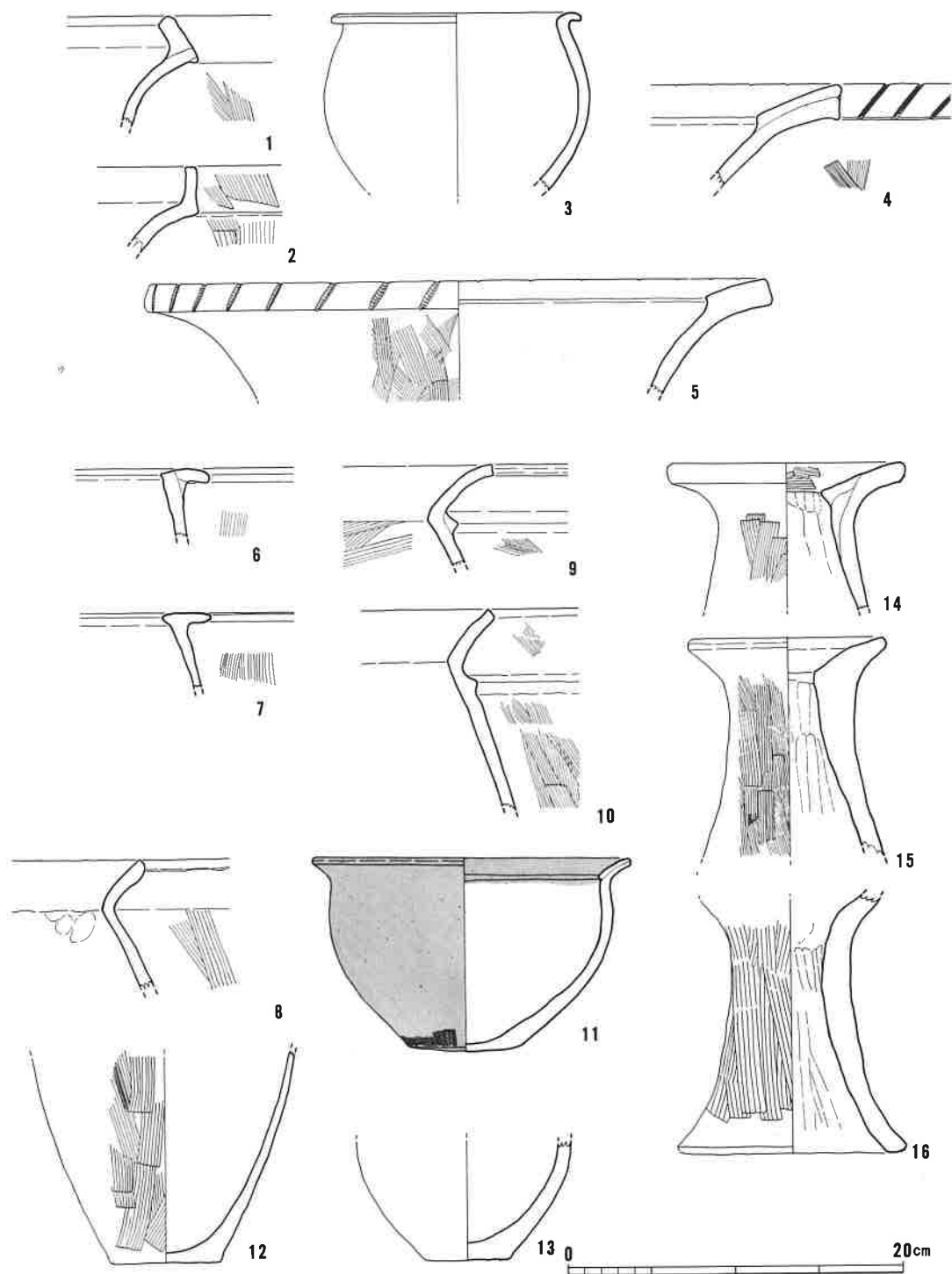


Fig. 13 志登遺跡群 B 地点 SD-01(東溝)出土土器実測図(縮尺 1/4)

パイプのような形をした右の土製品は、その形状が、ひしゃくに似ていることから杓子形土製品などといわれているようである(Fig. 14)。

全国的に出土例は多くないが、弥生時代から古墳時代にかけての類例が知られている。



Fig. 14 杓子形土製品の出土状況(SD-01・東溝)

溝状遺構の北側の土器の間から出土した銅鏃は、当初柔らかい緑青に包まれていた(Fig. 15)。

弥生後期のある時、溝に流れ込んだのだろうが、鑄造されてからどういう変遷を辿ったのだろうか。



Fig. 15 銅鏃の出土状況(SD-01・東溝)

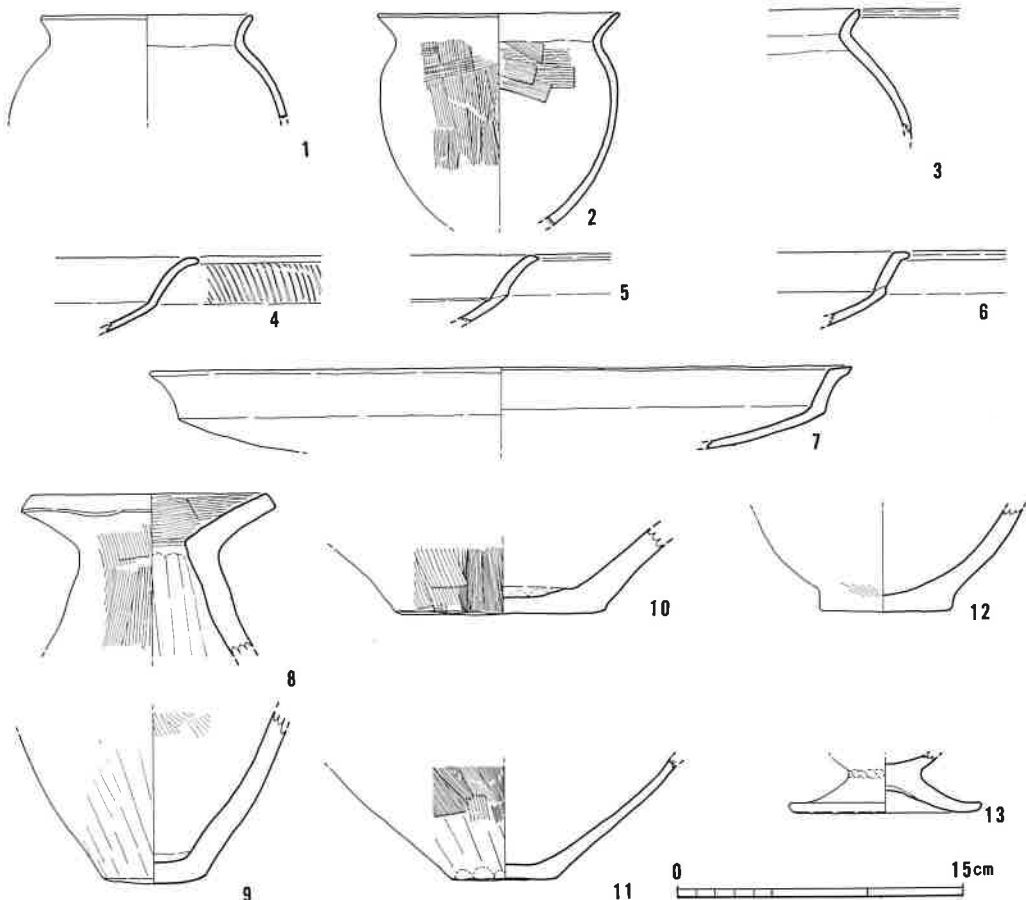


Fig. 16 志登遺跡群B地点SD-02(中央溝)出土土器実測図(縮尺1/4)

13 遺物の概要

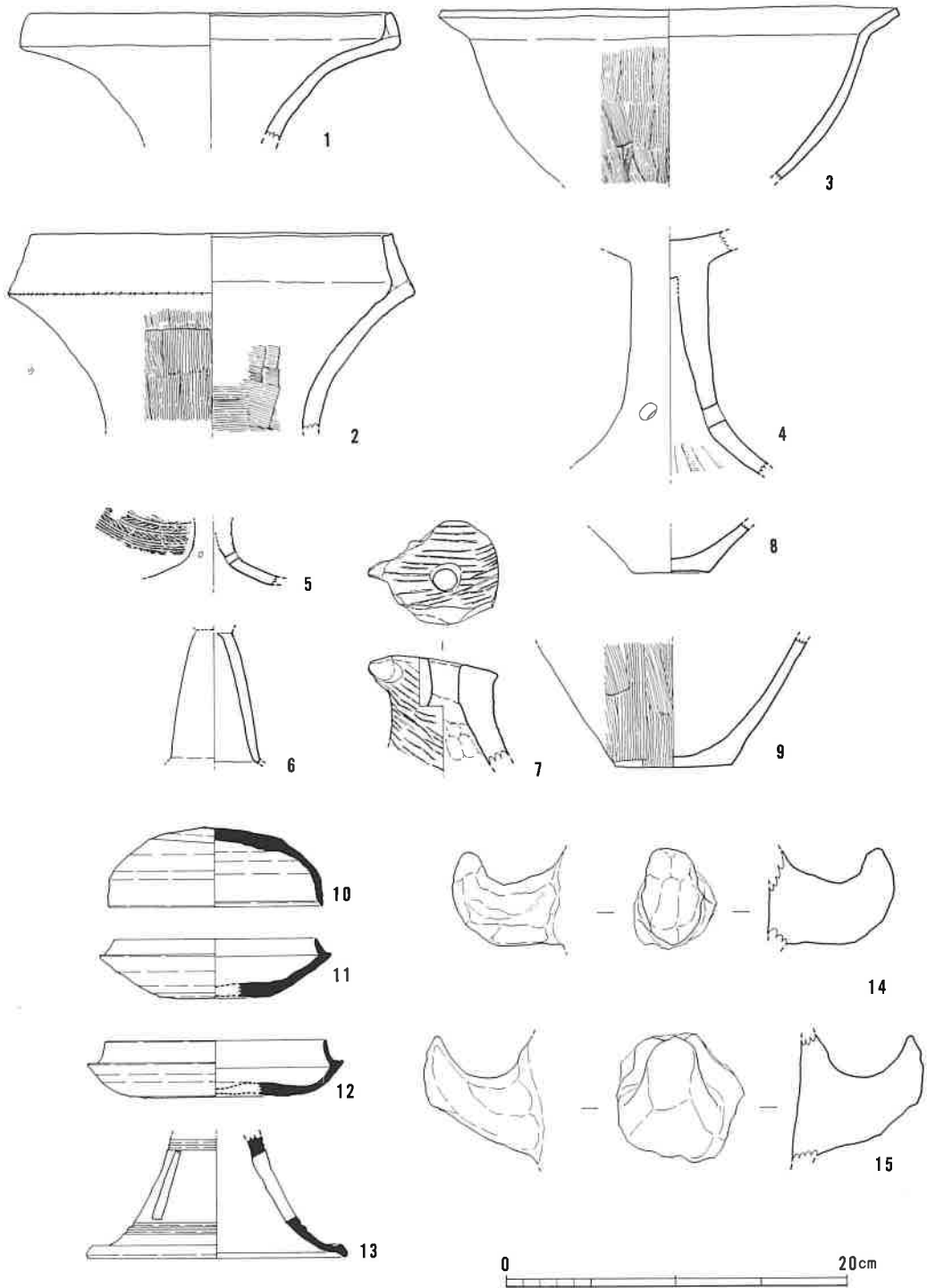


Fig. 17 志登遺跡群B地点SD-03(西溝)出土土器実測図(縮尺1/4)

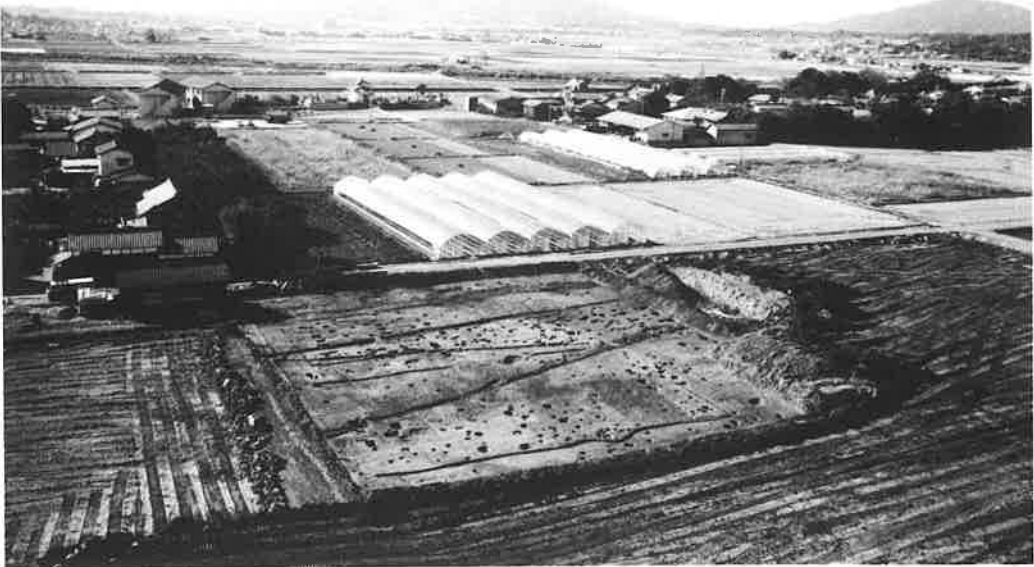
第4章 小 結

志登およびその周辺は埋葬の形式に支石墓をとり入れるなど、国内で最も大陸文化の影響を反映する地域の一つである。

今回出土した弥生時代の銅鏃については県下でも板付遺跡（福岡市博多区）や今川遺跡（宗像郡津屋崎町）など数ヶ所において知られるのみであり、糸島方面での出土例はこれまで知られていなかった。国内では北部九州の他は畿内地方における分布がとくに多く知られている。銅鏃の出土は断片的ではあるが弥生時代の青銅器文化の一端を示すものであるといえるだろう。

また今回検出された溝状遺構および道路状遺構の性格については断定することは難しいが、古代における糸島水道の位置づけとも相俟って、今後の調査に期せられるところである。今年度の調査は2,000㎡余りの面積ではあったが、志登地域の埋蔵文化財の重要性を再確認するに至らしめたのである。

今後、資料の整理・分析をすすめて地域の様相を明らかにしたいと考えている。



東上空より調査区をのぞむ(後方は可也山。その手前の木立ちは志登支石墓群)

福岡県前原町
志登遺跡群B地点

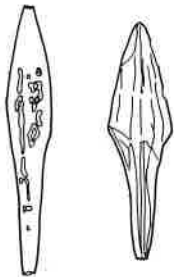
昭和59年3月31日

発行 前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623

印刷 青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31



付図 志登遺跡群 B 地点遺構配置図 (縮尺 1/250)



(arrowheads)

The general report on investigation of Shito Site B point
Maebaru-machi, Fukuoka Prefecture